

58-83

作||マキノノゾミ

演出||西川信廣

再びこの地を踏まず

異説・野口英世物語

文学座上演台本

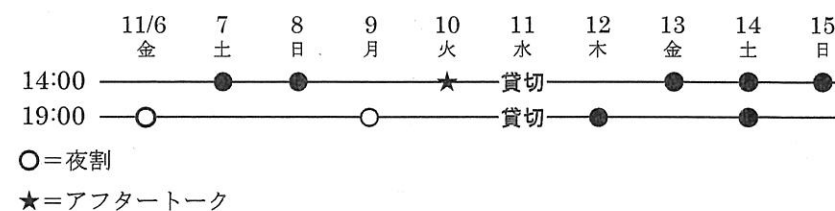
東京公演 十一月六日(金)〜十五日(日)

紀伊國屋サザンシアター

地方公演 二十一日(土)〜二十九日(日)

可児・尼崎・長岡

24三交社
03-3267-3641
info@san24.co.jp



登場人物 (登場順)

奥住 亀吉	歯科医学者 血脇の弟子	佐川 和正
八子 弥寿平	猪苗代の薬種問屋 野口の小学校時代の同窓生	鈴木 弘秋
秦 佐八郎	細菌学者 野口と伝染病研究所時代の同期入所	若松 泰弘
野口 英世	細菌学者	今井 朋彦
山内 ヨネ子	済世学舎の医学生 野口の初恋の女性	藤崎 あかね
お内 儀	ヨネ子の下宿先の主婦	富沢 亜古
血脇 守之助	歯科医学者 野口の恩師	瀬戸口 郁
血脇 ソデ	血脇の妻	永川 友里
渡 辺	東京歯科医学院の書生 血脇の弟子	後田 真欧
荒木 紀男	同右 野口の同居人	西岡 野人

第一幕

明治三十一年（一八九八）の暮れ。日の暮れた頃。
東京芝伊皿子いづみこの高山齒科医学院の応接室。

質素なソファに八子弥寿平（二三）が座っている。
学僕の奥住亀吉（一六）が茶を出している。

奥住 どうぞ。

八子 ありがとう。

奥住 外は寒かったでしょう。

八子 いやーここのぐれえなもん福島にさ比べたら。

奥住 初めての東京で迷わなかったですか。

八子 人力車さ奮発したから。伊皿子の高山齒科医学院でしゃべったら苦も
なく来てくれた。……いやに静かだないし。

奥住 学院は昨日から冬休みに入ったんです。けどちようどよかったですよ、

野口さんもそろそろお帰りになる刻限ですから。

八子

したけぞえれーもんだな^し。北里博士の伝染病研究所といったら細菌学の大本山だべ^し。そこで若手のナンバーワンだというんだからな^し。

奥住

毎朝わたしと一緒に雨戸を開けまして、庭掃除をして、それから愛宕下の伝研のほうにお出かけになります。夕方お帰りになると普段はこの学院の講義をなさって、それが済むとカールデンの翻訳やら順天堂の医事週報のお仕事で毎晩遅くまで起きておられます。その精励恪勤ぶりたるやとても常人の及ぶところではありません。

八子

んだべ。昔からそういう剛毅不屈の男なんだ。したけど緊張するな^し。東京で出世した野口君と会うのは初めてだからな^し。

奥住

へー竹馬の友でもそういうものですか。

八子

したって名前まで変わっちまったべ^し。野口清作あらため野口エイセイ。本当はヒデヨと読むのだそうですよ。

奥住

野口英世か。立派な名前だ。もうえれー先生みてーだ^な。

八子

でもその理由というのが振るってますよ。……キミ、坪内逍遙の『当世書生気質』という小説に「野々口精作」なる医学生が出てくるのを知っておるか。しかもこの野々口精作が女に溺れて学業も成らず、すっかり墮落してしまうという筋書きなのだ。験が悪いにもほどがある。

世間に吾輩がモデルと思われては堪らんから言われる先に改名してやったのだ……本当にそんなことを真面目な顔でおっしゃるんですもの。可笑しくって。

八子

いやいやそれはもつともな話だべ^し。

奥住

けど小説なんてどうせ作り話じゃありませんか。何も御自分の名前まで変えなくったって。

八子

いやいや決してそうではね。何事も最後までゆるがせにしねーで徹底する。そこが彼の天才児たるの所以なんだ。ああ緊張するな^し。

奥住

フッフ、でも野口さんいつも自慢されてますよ。やれこの銀時計は八子君から貰ったものだ、この服も帽子もインバネスも全部そうだが、どうだやっぱりモノが違うだろうって。野口さんの出で立ちを上から下まで八子さんが差し上げたようなものでしょう。

八子

それはまあそうだね^しよ。

奥住

それならむしろ大威張りがいいじゃありませんか。だいいち融通されたお金だつてずいぶんな額でしょう？ 安田銀行の為替が届くたびにヒヤヒヤしますよ。こんなに頻繁に無心する野口さんもまあ並大抵なお方じゃないけれど、送ってこられる八子さんも八子さんだ、いくら

親友でもこれほどの献身的援助ができるというのは大概じゃないなつて。

八子 まあオレは小原庄助だからな^{しい}。
奥住 え、何です？

と、八子が歌った。

♪ 小原庄助さん なーんで身上つーぶした

お馬 お神輿 おだてに乗るのが大好きで

そーれで身上つーぶした

はア もつともだゝ もつともだ

奥住 ハハハ、何ですそれ。

八子 オレたちが子どもの頃^にから流行つゝる歌でな^い。その庄助さんとおんなじだ。オラも野口君におだてられるとついつい金^ぞ出してしまうんだ。

奥住 フッフ、けどほどほどにしておきませんと。そのうち本当に身上つぶ

してしまいますよ。

八子 んだな。氣イつけねばな^い。

八子、笑ってお茶を飲む。……チョット真顔になる。

八子 実は、今日はちいっと言い出しにくい用件もあつてな^い。

奥住 おや、何です？

八子 うん……。

奥住 あ、すみません別に立ち入るつもりは。

八子 いや構わね。実はこの一年ばかり、オレんちの家業のほうがちいっと左前でな^い。したから野口君に送つとつた金も家には内緒でコッソリ工面したものだっただけ^にじよ……それが三日前とうとう親にばれましてな^い。

奥住 おやおやそれはまた……で、どうなつたんです？

八子 まあ親父様はわかつてくれたんだけ^にじよ、おつかさんがえれー剣幕で怒つてな^い。おめは人さ好きなんだ。本当に身上つぶす氣かつてな^い。っちゃんだ^なし。

奥住 そりゃそうでしょうとも。では……もしや今日は取り立てに？

八子 まさか。親友にそだな不人情な真似さできね。ただ……インバネスを
ない。

奥住 インバネス？ あの素敵な毛織の？

八子 なんだ。あれはオ^レの結婚支度にとおっかさんが特別に仕立ててくれた
物でな^い。したから、せめてあのインバネスくらいは返してもらえ、
そうでなければオ^レは承知さできねーぞと、きつーく言われてしまっ
てな^い、それでこうして東京に。

奥住 なるほど。そういうことだったのですか。

八子 したけんじょ貸した物ならともかく一度は進呈した物を今さら返して
けろとは、これはやっぱり言いづれーや。^{いとなんだし}

奥住 そうですよねえ。……でも、そういえば最近あのインバネスを見ませ
んね。

八子 え？

奥住 ずいぶん寒くなったのに妙だなとは思っていたのですが……これは事
によるとあのインバネス、質屋にでも入っているのじゃないかしら。

八子 野口君、またそんなに困つとるの^がけ？

奥住 それが不思議なんですよねえ。伝研からも月々のものはちゃんと頂い
ているはずなのに、入ってきたお金はまるで羽が生えたようにたちど

ころに飛んで行ってしまうんです。

八子 ふーん、羽が生えたようにな^い……。

奥住 ええ。ですからいつも素寒貧で始終ピーピー言っておられますよ。

八子 医者さ使うものは本でも何でも高えというからな^い。……そうか。野
口君、相変わらず苦学してんだな^い。

と、玄関から「ごめんください」の声。

奥住 おや誰だろう。ちょっと失礼します。

奥住、出て行く。

八子は茶を飲んで、ため息をつく。

八子 (独言) はあゝあ。なじよししたもんだべか……。

奥住、秦佐八郎（二六）を連れて戻ってくる。

奥住 伝研の秦さんとおっしゃる方で。

秦 秦佐八郎と申します。野口君の同僚です。

奥住 こちら野口さんのご友人で。

八子 八子弥寿平と申します。野口君とは猪苗代高等学校で机さ並べた間柄で、今は家業の薬種問屋（会津）ば継いでおりやす。

秦 ほう。ではわざわざ福島から。そうですか。

奥住 当学院の書生奥住亀吉です。ただ今お茶を。

秦 いえ、どうか構わんでください。それより野口君の様子はいかがです？

奥住 おや。伝研で一緒だったのではないのですか？

秦 いいえ今日は欠勤でした。事務局の方へは風邪をひいたと連絡があったようですが。

奥住 おかしいな。いつも通りにお出かけでしたが。

秦 おや。そうでしたか。

奥住と八子、顔を見合わせる。

八子 どういうことだなし？

奥住 妙ですね。

秦 ふむ……まあ大方そんなことだろうとは思ってましたがね。

奥住 とおっしゃいますと？

秦 野口君近頃は欠勤が多いのです。無断で三日も四日も出て来ない日も

あります。

あれよあ
ええ？

奥住 伝研へは出ずに……それではどこに行っているのでしょうか？

秦 さあそこまでは。

八子 仕事さうまくいってねーんだべか。

秦 それもあるのかも知れませんが。

奥住 野口さんはいったいどんな研究をなさっているのですか？

秦 そんなきみ、研究などと呼べるような仕事はまだ。

八子 したけど野口君は若手のナンバーワンで、北里博士にもいちばん期待されとるのではありませんか？

秦 さあ所長のお心までは知りませんが、わたしも野口君も今年入所したばかりの下っ端です。使い走りのいわば助手見習いに過ぎません。まだまだ自分の研究など始められる身分ではないのです。

八子

はあ、そうだったのですか。

秦

ま、野口君にはわたしがちよつと寄つたただけお伝えください。それではこれで失礼します。

八子

あ、^{ちよ}つと待つてくなんしょ。

秦

何でしょう。

八子

北里研究所といえは普通は帝大さ出た立派な学士様でなければ入れねー所だとお聞きしやした^{んた}げんじよ。

秦

ええ。わたしと野口君より他は皆さんそのような方です。

八子

秦

研究所ではその、野口君どんな様子なんだべか、皆さんの評判とかはさて。他人の評判となるとわたしにもちよつと分かりかねますね。

八子

どんなことでも構わねーのです。したつて伝染病研究所さ入所できた時はあれほど張り切つてお^{いた}たのに、それは無断で欠勤するだなんてこれは尋常なこととは思えね。何か心に面白くねーことがあつたのに違えね。お願えます。どうか教えてくなんしょ。

秦

そうですね。……一度こんなことがありました。あれは入所して間もない頃でしたが、野口君は自分の研究の為と称してモルモットを十三匹要求して、それが所内で笑いの種になったことがあります。

八子

なじよして。

秦

高価な動物なので部長でさえ年間五匹までの支給と内規で定められておるのです。それを新入りの助手見習いが堂々と十三匹も要求したのですからまこと大胆不敵と申すべきか、世間一般の常識から外れた所^い為^いというか。以来彼のことを陰で「モルモット君」などと呼ぶ者もおるようです。

八子

それはつまり……馬鹿にされとることだべか。

秦

(うなずく) こう申しては気の毒ですが、彼にはいささか長幼の序をわきまえぬところがあります。それゆえ所内ではいささか孤立しておる感がありますね。

八子

^そうがし^んだすか……。

秦

しかしだからといって本人がこのまま墮落してしまうというのでは、あまりに情けない。

八子

墮落というと？

秦

近頃あまり質のよくない噂を耳にします。紅燈の巷にさかんに出入りして、つまり、そちらの方面の遊びにうつつを抜かしておるらしいとか。

八子

女子ですか……。

奥住

まるで「野々口精作」ですね……。

秦

そんなものに惑溺してこのまま彼の学才が埋もれてしまつてはあまりに惜しいことになる。ここは一番、朋友である貴公からも一片の箴言あらんことを切に希望いたします。

八子

はあ……。

秦

ではこれで。

秦、帰りかける。

と、玄関の方角から上機嫌で歌う声。

♪ 小原庄助さん なーんで身上つーぶした

朝寝 朝酒 朝湯が大好きで……

奥住

お帰りです。直ぐに呼んでまいります。

奥住が慌てて出て行く。

秦

あの声はいささか酩酊の様子ですな。
んだすな。

八子

彼は飲みだすと止まらないとも聞きました。
んだすな。何事も徹底的にやる性分なもんですから。

八子

と、たちまちドタドタと足音が聞こえ、上機嫌の野口英世
(二三) が飛び込んでくる。

野口

いよおー八子オ、おめいつ出てきたんだ。電報さくれたら上野まで
迎えさ出たのに。

八子

いや、急に來ることになつてよ。

野口

そうか、よく訪ねてくれたなり。よし今日はとことん飲もう。秦さん
もここへは初めてでねーか。どうしたんだ、珍しいこともあるもんだ

な。

秦

なにちよつときみと話したいことがあつてね。

野口

そうか。ならば秦さんも一緒に行こう。これから皆して品川辺りにド

ツとくり出そうじゃないか。あ、その前に紹介しておかねばなんねーな。ボクの親友の八子弥寿平君です。いや親友どころではねー。むしろ大恩人というべき仁です。八子君がいなければ今日の野口はない。八子君、こちらは秦佐八郎さんだ。岡山の医学校さ出て今年からボクと一緒に北里研究所に入所された。このあいだ可愛らしい奥さんさ東京に呼び寄せられたばかりだ。ねえ秦さん。

秦

野口君、ちよつと五分ばかり外に出ないか。悪いが二人だけで話したいことなのだ。

八子

それなら自分^{オレ}が外しましよ。どうぞこのままここで。

奥住

そうですね、では八子さんはわたしの部屋へ。

八子と奥住、「どうぞごゆつくり」「失礼します」などと

口々に言いながらそそくさと出て行つた。

野口

何だ、つまらん。

野口、片づけ残っていた八子の茶を土瓶の口から飲んで「フー」と息をつく。

野口

何だい話つて。

秦

だいぶ酔っているのかね。

野口

なに二合か三合ひっかけたきりだ。こんなもん酔ってるうちには入らね。大丈夫だ。何だい。

秦

今日はどうして欠勤したのだ。

野口

……。

秦

研究室で何か面白くないことでもあつたかい。

野口

別に。何もありゃしね。いつも通りだ。試験管を洗って、兎小屋の藁を交換して、実験中犬つころの首根っこを押さえて……何だ、話というのほそんなことか。

と、秦は鞆から一冊の洋書を取り出した。

秦 きみ、この本に覚えがあるだろう。

野口 ジェンナーの『近代免疫学序説』でねーか。それがどうしたのだ。

秦 伝研の蔵書印が押してある。一昨日神田の古本屋で見つけたのだ。

野口 え……？

秦 単刀直入に訊くよ。きみが売り払ったのか。

野口 まさか。どうしてボクがそんなこと。

秦 だが少なくとも持ち出したのはきみだろう。

野口 ……。

秦 図書係のきみでなければこんなもの容易に持ち出せやしないじゃないか。どうなのだ。

野口 ああ。いかにも持ち出したのはこのボクだ。

秦 ではそれを知人に貸したということか？

野口 ……。

秦 どうなのだ。

野口 そうだ。済世学舎の頃の友人だ。前期開業試験の参考に貸してもらえねーかというから友だち甲斐に貸してやったんだ。

秦 そうか。ではその友人がロクでもない人間だったのだな。

野口 うん、理屈ではそうなるな^{すべし}い。……ボクは悲しいよ。ひじょうに悲し

い。……畜生。

野口、再び土瓶の口から茶を飲む。

秦 いいかね野口君。言うまでもなく伝研の蔵書は伝研の所有物であつて、

いち図書係が勝手気儘に私^{わたし}してよいものではない。こんなことが北里^{きたり}先生に知れたら、きみは伝研にいらなくなるよ。きみには事の重大さがわかつているのか？

野口 ……。

秦 とにかく今後はつつしみたまえ。買い戻した五円はボクが立て替えて

おいた。返済はいつでもいい。話はそれだけだ。じゃ、さよなら。

野口 待つてくんつえ。……なあ秦さん。正直に言ってくれ。あんた、この本を見つけた時にこの野口を見損なつたろう。放蕩する金欲しさに伝研の蔵書^{ぞく}を手え付けるとは、何と浅ましい男かと。だがこれだけはボクの名譽に関する^{にか}ことだから言わせてもらうが、ボクは断じてそんな男ではねーよ。いくら貧しい水呑みの倅でも、ボクは断じてそんなこ

とはせん。本当だ。

……。

秦

野口

信じてもらわねば、ボクの立つ瀬がね。

わかった。信じよう。本を見つけた時には無性に腹が立って、正直きみを見損なつた。そのことは謝ろう。

秦

野口

なあ秦さん。あんたは毎日平気かね。せつかく天下の伝研に入ったというのに、仕事といえは先輩の使った試験管を洗うことと動物小屋の掃除ばかりだ。細菌学のサの字もね。こんな仕事医師免許なんぞなくつたつてその辺の婆さまや子供にだつて出来るんべ。

そんなこと言つたつて仕方がない。ボクたちはまだ修業期間中なのだから。

秦

野口

北里先生はおっしゃつた。五年も辛抱すればきみにも留学の順番さ回つてくる。だから頑張れと。だげんじよそんな口約束とうてい本当のこととは思えね。だいたい帝大出の先輩たちが二十八人もおる。上から順繰りに洋行してもこの先四十年近くかかるんべ。自分の番さ回つてきた頃には下手したら六十さ越えてるかも分かんね。秦さんはそれでも平気かね。……ボクはゴメンだ。とてもでねーが居ても立つても

いらねんね。……去年は志賀さんが赤痢菌いんば見つけた。細菌学の世界は競争の世界だ。ヨボヨボになつたボクたちが鳩杖ついて赤ゲットして

やつとこ一人前の細菌学者さなつたところで、もう目ぼしい細菌はあらかた見つけられてオラたちには何も残つてねーかも分かんね。あんたはそれでも平気かね。

秦

馬鹿々々しい。留学だとか何とか、そんなことは自分の修学の機が熟してよくよく先の話だ。今は目の前の小さな仕事をコツコツと積み上げて細菌学者としての自分の土台をしつかりと築くのが先決だろう。まだ蛙にもなつていないオタマジャクシが大海を語るのはいよいよそんなふうに大海のことを語るのは滑稽だよ。

野口

フ、あんたはやつぱり士族の出だない。だからそんな綺麗ごとが言えんだ。

秦

いいかげんにしないか。誰が偉いとか偉くないとか、そんな不平ばかり並べていて何になる。野口君、はつきり言うがきみはいささか礼節に欠けている。もう少し謙虚になりたまえ。

野口

フ、謙虚か。そんなもの犬に食われろだ。

秦

何ッ？

野口 秦さん、昨日研究室に届いた新しい顕微鏡写真機を見たかね。

秦 いや、話には聞いたがまだ見てはおらん。

野口 ドイツ製の最新機だ。立派なものだ。

秦 もう見たのかい。

野口 (うなずく) 昨日ちょうど箱から出して試験的に操作してみようというところに居合わせた。だけんじょ誰にも操作の仕方^{かた}が分からなかった。説明書きのドイツ語が難しくて読めねーというのだ。ボクには読めた。理解もできた。だから自分が操作してみましようかと申し出たんだ。そしたら先輩の一人が言下にこう言ったさ。出過ぎた真似ばすんな、これはおめのような者が触っていい機械ではねーんだぞって。「下がれ下郎！」というわけさ。

秦 ……。

野口 その場で操作法の見当^{かた}がついたのはボク一人だった。だから申し出たまでだ。それなのに……それなのに(次第に怒りがこみ上げる)これはおめのような者が触っていい機械ではねーんだぞとは一体どういう言い草だべ? それがいやしくも合理^{むし}ば重んじる科学者の言葉かね。これが謙虚でねーということなら、オレ謙虚になるなんて真っ平ゴメ

秦

……。
と、そこへ八子が飛び込んだ。
んだ。実験の計画を立てて必要なモルモット^{モルモット}を要求して何が悪いんだ。無理なら無理とそれだけ言えば済む話でねーか。それがなじよして笑われねばなんねーんだ! なあ秦さん教えてくんつえ、なじよしてオレは怒鳴りつけられねばなんねーんだ!

と、そこへ八子が飛び込んだ。

八子 もういいよ。^{かんべ}そこまでにしておけ野口君。

野口 何だおめ、ずっと立ち聞きしてたの^{かよ}。

八子 秦さんだって野口君のことさ心配してしゃべってくれてんだ。^{ってんだ}この人

野口 はいいい人だ。秦さんに喰ってかかってはなんね。な、野口君。

八子 いいからおめは引っ込んでろって。今大事な話^わしてんだから。
したけどな野口君。

野口 いいからあっちさ行ってるって。

秦 野口君。ボクにだって学問上の野心はあるよ。

野口 え? すまね、今何か言ったべか。

秦

身の程知らずの野心を抱いているのは何もきみだけじゃないと言ったのだ。細菌学に志して北里門下となった以上、ボクだっていつか先生や志賀さんに負けないくらい立派な仕事をしたいと思っている。世界が瞠目するような一大発見をして大いに吾が面目をほどこしたいと内心ではいつも野望しているよ。

野口

それならあんだって。

秦

まあ聞きたまえ。だからこそさ。今はその為の大事な修行の期間だと心得るからこそ、ボクは毎日一所懸命に勤めているのだ。

野口

……。

秦

野口君。きみも明日はきちんと出勤したまえ。そして笑われようが叱られようが先輩に命じられた仕事をきちんとし遂げるのだ。たとえそれが子供にでも出来るような仕事でもだ。修行と云うのはそういうものだ。いいかね。これがただ一度きりのボクの忠告だ。二度とはしない。このまま他人を恨んでその身を滅ぼすというのならそうするがいい。勝手にするさ。

秦、八子に一礼して出て行く。

八子は思わず最敬礼で見送った。

野口はふてくされたようにソファに横になる。

野口

……フ、士族出身者はすぐにああやって恰好つけんだ。

八子

したけど、ありがてー忠告だな^い。

野口

だいたいおめがおかしなところで半畳入れるからいけねんだ。……全部聞いてたのか。

八子

すまね。したけど……今のはありがてー忠告だ。なあ野口君。これはそう思わねばなんねーぞ。

野口

フフ……おめは相変わらずお人好しだな^い。(起き上がって) まあいいべ。みてろ。オ^レあの男にだけは絶対負けねーから。

八子

んだ。その意気だ。

野口

よし、したら景気さつけて飲みに行くべ。

八子

おう。

奥住

その前に野口さんちよつと。

野口

何だ。

奥住

近頃よく花魁遊びをなさるのですか？

野口 え、な、何だいきなり。だ、誰がそ^んだなことを……。
奥住 さつき秦さんがよくそういう噂を聞くと。

野口、たちまち真っ赤になった。

野口 いやいや参ったなー秦さん、子供にそ^んだなことまで……ハハ、ま、たまにな。

奥住 もしかして以前からよく行かれておりますか？

野口 だからそれはきみ、たまにだよ、たまーに。決してそれほどしょっちゅうというわけではねー。まあつまり何だ、時としてその鬱勃たるパトスというものがだな……。

奥住 でもその所為でいつもお金が足りないではありませんか？ それで

八子 八子さんに何度も無心なさっていたのでは八子さんはいい面の皮じゃありませんか。

八子 ^{さすけぬ}いいんだよきみ。

野口、シユンとなる。

野口 すまん八子君。これはまったくもって一言もねー。した^{げんじょう}けど時々なじ

八子 よしてもその、ボクの鬱勃たるパトスがだな……。

八子 仕方ねーべや。健康な男児だもの。それくらいのことはあつて当然だべ。

奥住 (呆れて) 君子だなあ、八子さんは。

野口、大袈裟に感動して八子の手を取る。

野口 まったくだ。この世にきみほどの君子はいねー。ボクは一生恩に着るよ。

奥住 それともう一つ。毛織のインバネスはどうなさったのです？

野口 ん、インバネス？

八子 きみ、それももういいんだ。

奥住 だつて八子さん。

野口 ああ。きみから頂戴したあの上物のインバネスなら大丈夫だ。さすけね。宇田川でちゃんと大事に預かってもらつてっから。

奥住 ほーらやっぱり。

八子 宇田川って？

奥住 近所の質屋です。それも花魁の玉代ですか。

野口 馬鹿言え。そっちは秋山の入院費の払いだ。

八子 え、入院って……秋山君どつか悪いのけ？

野口 うん、このあいだ腸チフスをやつてな。

八子 ええッ？

野口 なに病気はもうすっかり治つてんだ。さすけねさすけね。

八子 したけど腸チフスだなんて只事ではねーべ。

奥住 どなたです？

野口 なに秋山義次よじといつてこれもやつぱり猪苗代の同窓でな。本郷の区

役所裏に下宿してんだ。

八子 いったいいつのことだべ？

野口 あれは九月の終わりだったべか、何でもまだ暑い頃だった。その日も

何だかクサクサしていてな。秋山に金借りて二人で洲崎にでもくり出すべかと訪ねて行つたんだ。したらあいつ風邪かぜばひいたと言つて寝込んでやがんだ。したけど見ればどうも様子が変だ。どうもただの風邪とは思えね。したからすぐに人力車で順天堂じんてんどう運んでな、副院長に

診せたら案の定腸チフスという診断だ。秋山の奴はいっぺんに蒼くなつたが、なにきみ、チフスなら伝研の専売だから任せておけと言つて直ぐに付属病院ふくぞうに入院させたんだ。したらさすがに天下の伝研だでな。わずか三週間で快癒、無事退院だ。

奥住 よかったですね。

八子 うん、よかったよかった。秋山も近くに野口君のいたことは何という僥倖だべ。きみはまったく秋山の命の恩人だな。

野口 なーに恩人というなら向こうがずっと先だべ。若松の会陽医院でこの左手さ手術してもらつた時、秋山は猪苗代から五里の道さずつと付き添つてくれた。手術さ終わると今度は駆けて戻つて直ぐにオレのおつかさんに知らせてくれた。あの時のことはオレ一生忘れね。今度のことで少しはその恩に酬むかふことさできてオレ嬉しく思つてんだ。おい、おめだつてそうだぞ八子。おめが病気になつてもオレが絶対に死なせねーからな。必ず助けてやつから。ドーンと大船さ乗つた気でいろシ。

八子、感激する。

八子 野口君、きみって男は……。
野口 よし、^{そんじや}したち飲みに行くべ。今川橋の畔ところに美味しい天ぷら屋があるんだ。
八子 よし、したちこれから三人で行くべ。勘定はオカ^レが持つから。
野口 何言ってんだ。はるばる福島から汽車賃使って出てきたんでねーか。心配するな、今日は全部オカ^レの奢りだ。

八子、ますます感動する。

八子 野口君……。
奥住 大丈夫なんですか？
野口 大丈夫だ。した^ちから八子、すまねえけんじよ二十枚ほど貸してくれ。
八子 え？
奥住 大丈夫じゃないじゃないですか。
野口 何言ってんだ。奢るのはあくまでこの野口だ。ただその金がたんねーから貸してくれと言ってるだけだ。理路は整然としとるべや。
奥住 そうかなあ。

八子 んだない、理屈は合ってるべ。
野口 そらみろ。
奥住 えー？

八子、財布から紙幣をすべて取り出して野口に渡した。

八子 今日は野口君に存分に御馳走になるよ。
野口 おう、任せとけ。^{じゃ}さ行くべ。
八子 おう。

野口と八子、嬉しそうに出て行く。

奥住 (独言) 君子だなあ……。

と、奥住も後を追った。

玄関の方角から「♪小原庄助さん、なーんで身上つーぶした」と陽気に唄う声が遠ざかって行き……溶暗する。

音楽……。

奥住、客席に向かい立つ……。

奥住

結局野口さんが八子弥寿平さんに無心した総額は千円を超すとも言われています。現在のお金に直せば二、三千万円にも相当する額だとか。いやはや、何とも凄まじいと申しましょうか、大らかと申しましょうか。やはり御母堂のおっしゃる通り人が好いものにも程がありますね。……けれどこんな逸話もございます。これは野口さんがお亡くなりになつてずつと後の話ですが……その頃鉾山業に転じていた八子さんは、とある鉾山で一挙に十万円以上の大金を儲けたことがありました。今のお金なら数十億円の大儲けです。その鉾山の権利を譲り受けるにあたっては、あの野口博士の親友だったという信用が大いに役立ったのだそうで、後に八子さんはこんなふうに語ったそうです。「昔わずかばかり博士を世話して博士から十万円の御礼をもらった様なものだ」と。やはりどうも本物の君子ですね。……さて、野口さんはこの翌年、伝染病研究所から開設されたばかりの横浜海港検疫所の検疫官補へと

転じました。一説には、伝研の図書係だった野口さんが蔵書五冊を友人に又貸して紛失するという事件を起こしてしまい、それが伝研を去る一因となったのだとも言われています。横浜では入港した外国船からさつそくペスト病患者二名を発見するという手柄を立てられ、その功績もあつてその年の秋、内務省からペストが流行している清国牛^{ニウチヤン}の国際予防委員会へと派遣される医師団の一人に加わることとなりました。……時に明治三十二年の十月、野口英世博士数えで二十四歳の頃のことです。

奥住の姿が消える……と、舞台が変わっている。